

CHAPTER 14

次の日、ハリーの最初の授業は薬草学だった。

朝食の席では盗み聞きされる恐れがあるので、ロンとハーマイオニーにダンブルドアの授業のことを話せなかった。

温室に向かって野菜畑を歩いているときに、ハリーは二人に詳しく話して聞かせた。

週末の過酷な風はやっと治まっていたが、また不気味な霧が立ち込めていたので、いくつかある温室の中から目的の温室を探すのに、ふだんより少しよけいに時間がかかった。

「ウワー、ぞっとするな。少年の『例のあの人』か」

ロンが小声で言った。

三人は今学期の課題である「スナーガラフ」の節くれだった株の周りに陣取り、保護手袋を着けるところだった。

「だけど、ダンブルドアがどうしてもそんなものを見せるのか、僕にはまだわかんないな。そりゃ、おもしろいけどさ、でも、何のためだい？」

「さあね」ハリーはマウスピースをはめながら言った。

「だけど、ダンブルドアは、それが全部重要で、僕が生き残るのに役に立つって言うんだ」

「すばらしいと思うわ」ハーマイオニーが熱っぽく言った。

「できるだけヴォルデモートのことを知るのには、とても意味のあることよ。そうでなければ、あの人の弱点を見つけられないでしょう？」

「それで、この前のスラグホーン・パーティはどうだったの？」

マウスピースをはめたまま、ハリーがモゴモゴと開いた。

「ええ、まあまあおもしろかったわよ」ハーマイオニーがこんどは保護用のゴーグルをかけながら言った。

「そりゃ、先生は昔の生徒だった有名人のことをだらだら話すけど。それに、マクラーゲンをそれこそちーやほーやするけど。だってあの人はいろいろなコネがあるから。でも、

Chapter 14

Felix Felicis

Harry had Herbology first thing the following morning. He had been unable to tell Ron and Hermione about his lesson with Dumbledore over breakfast for fear of being overheard, but he filled them in as they walked across the vegetable patch toward the greenhouses. The weekend's brutal wind had died out at last; the weird mist had returned and it took them a little longer than usual to find the correct greenhouse.

“Wow, scary thought, the boy You-Know-Who,” said Ron quietly, as they took their places around one of the gnarled Snargaluff stumps that formed this term's project, and began pulling on their protective gloves. “But I still don't get why Dumbledore's showing you all this. I mean, it's really interesting and everything, but what's the point?”

“Dunno,” said Harry, inserting a gum shield. “But he says it's all important and it'll help me survive.”

“I think it's fascinating,” said Hermione earnestly. “It makes absolute sense to know as much about Voldemort as possible. How else will you find out his weaknesses?”

“So how was Slughorn's latest party?” Harry asked her thickly through the gum shield.

“Oh, it was quite fun, really,” said Hermione, now putting on protective goggles. “I mean, he drones on about famous ex-pupils a bit, and he absolutely *fawns* on McLaggen

本当においしい食べ物があつたし、それにグウェノグ・ジョーンズに紹介してくれたわ」
「グウェノグ・ジョーンズ？」 ロンの目が、ゴーグルの下で丸くなった。

「あのグウェノグ・ジョーンズ？ ホリヘッド・ハービーズの？」

「そうよ」 ハーマイオニーが答えた。

「個人的には、あの女ちょっと自意識過剰だと思ったけど、でもー」

「そこ、おしゃべりが多すぎる！」

ピリッとした声がかして、スプラウト先生が怖い顔をして忙しげに三人のそばにやって来た。

「あなたたち、遅れてますよ。ほかの生徒は全員取りかかってますし、ネビルはもう最初の種を取り出しました」

三人が振り向くと、たしかに、ネビルは唇から血を流し、顔の横に何か所かひどい引っ掻き傷を作ってはいたが、グレープフルーツ大の緑の種をつかんで座っていた。

種はピクピクと気持ちの悪い脈を打っている。

「オーケー、先生、僕たちいまから始めます！」

ロンが言ったが、先生が行ってしまうと、こっそりつけ加えた。

「耳塞ぎ呪文を使うべきだったな、ハリー」

「いいえ、使うべきじゃないわ！」

ハーマイオニーが即座に言った。

プリンスやその呪文のことが出るといつもそうなのだが、こんどもたいそうご機嫌斜めだった。

「さあ、それじゃ……始めましょう……」

ハーマイオニーは不安そうに二人を見た。

三人とも深く息を吸って、節くれだった株に飛びかかった。

植物はたちまち息を吹き返した。

先端から長い棘だらけのイバラのような蔓が飛び出し、鞭のように空を切った。

その一本がハーマイオニーの髪に絡みつки、

ロンが勢定鉄でそれを叩き返した。

ハリーは、蔓を二本首尾よくつかまえて結び合わせた。

触手のような枝と枝のまん中に穴が空いた。

ハーマイオニーが勇敢にも片腕を穴に突っ込

because he's so well-connected, but he gave us some really nice food and he introduced us to Gwenog Jones."

"Gwenog Jones?" said Ron, his eyes widening under his own goggles. "*The* Gwenog Jones? Captain of the Holyhead Harpies?"

"That's right," said Hermione. "Personally, I thought she was a bit full of herself, but —"

"*Quite* enough chat over here!" said Professor Sprout briskly, bustling over and looking stern. "You're lagging behind, everybody else has started, and Neville's already got his first pod!"

They looked around; sure enough, there sat Neville with a bloody lip and several nasty scratches along the side of his face, but clutching an unpleasantly pulsating green object about the size of a grapefruit.

"Okay, Professor, we're starting now!" said Ron, adding quietly, when she had turned away again, "should've used Muffliato, Harry."

"No, we shouldn't!" said Hermione at once, looking, as she always did, intensely cross at the thought of the Half-Blood Prince and his spells. "Well, come on ... we'd better get going. ..."

She gave the other two an apprehensive look; they all took deep breaths and then dived at the gnarled stump between them.

It sprang to life at once; long, prickly, bramblelike vines flew out of the top and whipped through the air. One tangled itself in Hermione's hair, and Ron beat it back with a pair of secateurs; Harry succeeded in trapping a couple of vines and knotting them together; a

んだ。
すると穴が罠のように閉じて、ハーマイオニーの肘を捕らえた。
ハリーとロンが蔓を引っぱったりねじったりして、その穴をまた開かせ、ハーマイオニーは腕を引っぱり出した。
その指に、ネビルのと同じような種が握りしめられていた。
とたんにトゲトゲした蔓は株の中に引っ込み、節くれだった株は、何食わぬ顔で、木材の塊のようにおとなしくなった。
「あのさ、自分の家を持ったら、僕の庭にはこんなの植える気がしないな」
ゴーグルを額に押し上げ、顔の汗を拭いながら、ロンが言った。
「ボウルを渡してちょうだい」
ピクピク脈を打っている種を、腕を一杯に伸ばしてできるだけ離して持ちながら、ハーマイオニーが言った。
ハリーが渡すと、ハーマイオニーは気持悪そうに種をその中に入れた。
「びくびくしていないで、種を絞りなさい。新鮮なうちがいちばんなんですから！」
スプラウト先生が遠くから声をかけた。
「とにかく」
ハーマイオニーは、たったいま木の株が三人を襲撃したことなど忘れたかのように、中断した会話を続けた。
「スラグホーンはクリスマス・パーティをやるつもりよ、ハリー。これはどう足掻いても逃げられないわね。だって、あなたが来られる夜にパーティを開こうとして、あなたがいつなら空いているかを調べるように、私に頼んだんですもの」
ハリーはうめいた。
一方ロンは、種を押しつぶそうと、立ち上がって両手でボウルの中の種を押さえ込み、力任せに押していたが、怒ったように言った。
「それで、そのパーティは、またスラグホーンのお気に入りだけのためなのか？」
「スラグ・クラブだけ。そうね」ハーマイオニーが言った。
種がロンの手の下から飛び出して温室のガラスにぶつかり、馳ね返ってスプラウト先生の後頭部に当たり、先生の古い継ぎだらけの帽

hole opened in the middle of all the tentaclelike branches; Hermione plunged her arm bravely into this hole, which closed like a trap around her elbow; Harry and Ron tugged and wrenched at the vines, forcing the hole to open again, and Hermione snatched her arm free, clutching in her fingers a pod just like Neville's. At once, the prickly vines shot back inside, and the gnarled stump sat there looking like an innocently dead lump of wood.

“You know, I don't think I'll be having any of these in my garden when I've got my own place,” said Ron, pushing his goggles up onto his forehead and wiping sweat from his face.

“Pass me a bowl,” said Hermione, holding the pulsating pod at arm's length; Harry handed one over and she dropped the pod into it with a look of disgust on her face.

“Don't be squeamish, squeeze it out, they're best when they're fresh!” called Professor Sprout.

“Anyway,” said Hermione, continuing their interrupted conversation as though a lump of wood had not just attacked them, “Slughorn's going to have a Christmas party, Harry, and there's no way you'll be able to wriggle out of this one because he actually asked me to check your free evenings, so he could be sure to have it on a night you can come.”

Harry groaned. Meanwhile, Ron, who was attempting to burst the pod in the bowl by putting both hands on it, standing up, and squashing it as hard as he could, said angrily, “And this is another party just for Slughorn's favorites, is it?”

“Just for the Slug Club, yes,” said

子を吸っ飛ばした。
ハリーが種を取って戻ってくると、ハーマイオニーが言い返していた。
「いいこと、私が名前をつけたわけじゃないわ。『スラグ・クラブ』なんてー」
「『スラグ・ナメクジ・クラブ』」
ロンが、マルフォイ級の意地の悪い笑いを浮かべて繰り返した。
「ナメクジ集団じゃなあ。まあ、パーティを楽しんでくれ。いっそマクラーゲンとくつついたらどうだい。そしたらスラグホーンが、君たちをナメクジの王様と女王様にできるしー」
「お客様を招待できるの」
ハーマイオニーは、なぜか茄で上がったようにまっ赤になった。
「それで、私、あなたもどうかって誘おうと思っていたの。でも、そこまでバカバカしいって思っただったら、どうでもいいわ！」
ハリーは突然、種がもっと遠くまで飛んでくれればよかったのに、と思った。
そうすればこの二人のそばにいらなくてすむ。二人ともハリーに気づいていなかったが、ハリーは種の入ったボウルを取り、考えられるかぎりやかましく激しい方法で、種を割りはじめた。
残念なことに、それでも会話は細大漏らさず聞こえてきた。
「僕を誘うつもりだった？」ロンの声がからりと変わった。
「そうよ」ハーマイオニーが怒ったように言った。
「でも、どうやらあなたは、私がマクラーゲンとくつついたほうが……」
一瞬、間が空いた。
ハリーは、しぶとく撥ね返す種を移植ごてで叩きつけていた。
「いや、そんなことはない」ロンがとても小さな声で言った。
ハリーは種を叩き損ねてボウルを叩いてしまい、ボウルが割れた。
「レバロ、直せ」
ハリーが杖で破片を突ついて慌てて唱えると、破片は飛び上がって元通りになった。しかし、割れた音でロンとハーマイオニー

Hermione.

The pod flew out from under Ron's fingers and hit the greenhouse glass, rebounding onto the back of Professor Sprout's head and knocking off her old, patched hat. Harry went to retrieve the pod; when he got back, Hermione was saying, "Look, *I* didn't make up the name 'Slug Club' —"

" '*Slug Club*,' " repeated Ron with a sneer worthy of Malfoy. "It's pathetic. Well, I hope you enjoy your party. Why don't you try hooking up with McLaggen, then Slughorn can make you King and Queen Slug —"

"We're allowed to bring guests," said Hermione, who for some reason had turned a bright, boiling scarlet, "and I was *going* to ask you to come, but if you think it's that stupid then I won't bother!"

Harry suddenly wished the pod had flown a little farther, so that he need not have been sitting here with the pair of them. Unnoticed by either, he seized the bowl that contained the pod and began to try and open it by the noisiest and most energetic means he could think of; unfortunately, he could still hear every word of their conversation.

"You were going to ask me?" asked Ron, in a completely different voice.

"Yes," said Hermione angrily. "But obviously if you'd rather I *hooked up with McLaggen* ..."

There was a pause while Harry continued to pound the resilient pod with a trowel.

"No, I wouldn't," said Ron, in a very quiet voice.

Harry missed the pod, hit the bowl, and

は、ハリーの存在に目覚めたようだった。ハーマイオニーは取り乱した様子で、スナーガラフの種から汁を絞る正しいやり方を見つけるのに、慌てて「世界の肉食植物」の本を探しはじめた。

ロンのほうは、ばつが悪そうな顔だったが、同時にかなり満足げだった。

「それ、よこして、ハリー」ハーマイオニーが急き立てた。

「何か鋭い物で穴を空けるようになって書いてあるわ……」ハリーはボウルに入った種を渡し、ロンと二人でゴーグルをつけ直し、もう一度株に飛びかかった。

それほど驚いたわけではなかった……首を絞めにかかってくるトゲだらけの蔓と格闘しながら、ハリーはそう思った。遅かれ早かれこうなるという気がしていた。

ただ、自分がそれをどう感じるかが、はっきりわからなかった……。

自分とチョウは、気まずくて互いに目を合わすことさえできなくなっているし、話をすることなどありえない。

もしロンとハーマイオニーがつき合うようになって、それから別れたら……？ 二人の友情はそれでも続くだろうか？ 三年生のとき、二人が数週間、互いに口をきかなくなったときのことを、ハリーは思い出した。

なんとか二人の距離を埋めようとするのにひと苦労だった。

仮に、もし二人が別れなかったらどうだろう？ ビルとフラワーのようになったら、そして二人のそばにいるのが気まずくていたたまれないほどになったら、自分は永久に閉め出されてしまうのだろうか？

「やったあ！」

木の株から二つ目の種を引っぱり出して、ロンが叫んだ。

ちょうどハーマイオニーが一個目をやっと割ったときだった。

ボウルは、イモムシのように蠢く薄緑色の塊茎で一杯になっていた。

それからあとは、スラグホーンのパーティに触れることなく授業が終わった。

その後の数日間、ハリーは二人の友人をより綿密に観察していたが、ロンもハーマイオニ

shattered it.

“*Reparo*,” he said hastily, poking the pieces with his wand, and the bowl sprang back together again. The crash, however, appeared to have awoken Ron and Hermione to Harry’s presence. Hermione looked flustered and immediately started fussing about for her copy of *Flesh-Eating Trees of the World* to find out the correct way to juice Snargaluff pods; Ron, on the other hand, looked sheepish but also rather pleased with himself.

“Hand that over, Harry,” said Hermione hurriedly. “It says we’re supposed to puncture them with something sharp. …”

Harry passed her the pod in the bowl; he and Ron both snapped their goggles back over their eyes and dived, once more, for the stump.

It was not as though he was really surprised, thought Harry, as he wrestled with a thorny vine intent upon throttling him; he had had an inkling that this might happen sooner or later. But he was not sure how he felt about it. ... He and Cho were now too embarrassed to look at each other, let alone talk to each other; what if Ron and Hermione started going out together, then split up? Could their friendship survive it? Harry remembered the few weeks when they had not been talking to each other in the third year; he had not enjoyed trying to bridge the distance between them. And then, what if they didn’t split up? What if they became like Bill and Fleur, and it became excruciatingly embarrassing to be in their presence, so that he was shut out for good?

“Gotcha!” yelled Ron, pulling a second pod from the stump just as Hermione managed to burst the first one open, so that the bowl was

一も特にこれまでと違うようには見えなかった。

ただし、互いに対して、少し礼儀正しくなったようだった。

パーティの夜、スラグホーンの薄明かりの部屋で、バタービールに酔うとどうなるか、様子を見るほかないだろう、とハリーは思った。

むしろいまは、もっと差し迫った問題があった。

ケイティ・ベルはまだ聖マンガ病院で、退院の見込みが立っていなかった。

つまり、ハリーが九月以来、入念に訓練を重ねてきた有望なグリフィンドール・チームから、チェイサーが一人欠けてしまったことになる。

ケイティが戻ることを望んで、ハリーは代理の選手を選ぶのを先延ばしにしてきた。

しかし、対スリザリンの初戦が迫っていた。ケイティは試合に間に合わないと、ハリーもついに観念せざるをえなかった。

あらためて全寮生から選抜するのは耐えられなかった。

クイディッチとは直接関係のない問題で気が滅入ったが、ある日の変身術の授業のあとで、ハリーはディーン・トーマスを捕まえた。

大多数の生徒が出てしまったあとも、教室には黄色い小鳥が数羽、さえずりながら飛び回っていた。

全部ハーマイオニーが創り出したものだ。

ほかには誰も、空中から羽一枚創り出せはしなかった。

「君、まだチェイサーでプレイする気があるかい？」

「えっ—？ ああ、もちろんさ！」

ディーンが興奮した。

ディーンの肩越しに、シェーマス・フィネガンがふて腐れて、教科書をカバンに突っ込んでいるのが見えた。

できればディーンにプレイを頼みたくなかった理由の一つは、シェーマスが気を悪くすることがわかっていたからだ。

しかしハリーは、チームのために最善のことをしなければならず、選抜のとき、ディーン

full of tubers wriggling like pale green worms.

The rest of the lesson passed without further mention of Slughorn's party. Although Harry watched his two friends more closely over the next few days, Ron and Hermione did not seem any different except that they were a little politer to each other than usual. Harry supposed he would just have to wait to see what happened under the influence of butterbeer in Slughorn's dimly lit room on the night of the party. In the meantime, however, he had more pressing worries.

Katie Bell was still in St. Mungo's Hospital with no prospect of leaving, which meant that the promising Gryffindor team Harry had been training so carefully since September was one Chaser short. He kept putting off replacing Katie in the hope that she would return, but their opening match against Slytherin was looming, and he finally had to accept that she would not be back in time to play.

Harry did not think he could stand another full-House tryout. With a sinking feeling that had little to do with Quidditch, he cornered Dean Thomas after Transfiguration one day. Most of the class had already left, although several twittering yellow birds were still zooming around the room, all of Hermione's creation; nobody else had succeeded in conjuring so much as a feather from thin air.

"Are you still interested in playing Chaser?"

"Wha — ? Yeah, of course!" said Dean excitedly. Over Dean's shoulder, Harry saw Seamus Finnigan slamming his books into his bag, looking sour. One of the reasons why Harry would have preferred not to have to ask Dean to play was that he knew Seamus would

はシェーマスより飛び方がうまかった。
「それじゃ、君が入ってくれ」ハリーが言った。

「今晚練習だ。七時から」

「よし」ディーンが言った。

「万歳、ハリー！びっくりだ。ジニーに早く教えよう！」

ディーンは教室から駆け出していった。

ハリーとシェーマスだけが残った。

ただでさえ気まずいのに、ハーマイオニーのカナリアが二人の頭上を飛びながら、シェーマスの頭に落し物をしていった。

ケイティの代理を選んだことでふて腐れたのは、シェーマスではなかった。

ハリーが自分の同級生を二人も選んだということで、談話室はブツクサだらけだった。

ハリーはこれまでの学生生活で、もっとひどい陰口に耐えてきたので、特別気にはならなかったが、それでも、来るべきスリザリン戦に勝たなければならないという、プレッシャーが増したことは確かだった。

グリフィンドールが勝てば、寮生全員が、ハリーを批判したことは忘れ、初めからすばらしいチームだと思っていたと言うだろう。

ハリーにはよくわかっていた。

もし負ければ……まあね、とハリーは心の中で苦笑いした……それでも、もっとひどいブツクサに耐えたこともあるんだ……。

その晩、ディーンが飛ぶのを見たハリーは、自分の選択を後悔する理由がなくなった。

ディーンはジニーやデメルザとも上手くいった。

ピーターのピークスとクートは尻上がりに上手くなっていた。

問題はロンだった。

ハリーには初めからわかっていたことだが、ロンは神経質になったり自信喪失したりで、プレイにむらがあった。

そういう昔からのロンの不安定さが、シーズン開幕戦が近づくに従って、残念ながらぶり返していた。

六回もゴールを抜かれて――その大部分がジニーの得点だったが――ロンのプレイはだんだん荒れ、とうとう攻めてくるデメルザ・ロ

not like it. On the other hand, he had to do what was best for the team, and Dean had outflown Seamus at the tryouts.

“Well then, you’re in,” said Harry. “There’s a practice tonight, seven o’clock.”

“Right,” said Dean. “Cheers, Harry! Blimey, I can’t wait to tell Ginny!”

He sprinted out of the room, leaving Harry and Seamus alone together, an uncomfortable moment made no easier when a bird dropping landed on Seamus’s head as one of Hermione’s canaries whizzed over them.

Seamus was not the only person disgruntled by the choice of Katie’s substitute. There was much muttering in the common room about the fact that Harry had now chosen two of his classmates for the team. As Harry had endured much worse mutterings than this in his school career, he was not particularly bothered, but all the same, the pressure was increasing to provide a win in the upcoming match against Slytherin. If Gryffindor won, Harry knew that the whole House would forget that they had criticized him and swear that they had always known it was a great team. If they lost ... well, Harry thought wryly, he had still endured worse mutterings. ...

Harry had no reason to regret his choice once he saw Dean fly that evening; he worked well with Ginny and Demelza. The Beaters, Peakes and Coote, were getting better all the time. The only problem was Ron.

Harry had known all along that Ron was an inconsistent player who suffered from nerves and a lack of confidence, and unfortunately, the looming prospect of the opening game of the season seemed to have brought out all his

ピンズの口にパンチを食らわせるところまで来てしまった。

「ごめん、デメルザ、事故だ、事故、ごめんよ！」

デメルザがそこいら中に血をボタボタ垂らしながらジグザグと地上に戻る後ろから、ロンがさけ叫んだ。

「僕、ちょっとー」

「ーパニックした。・・」ジニーが怒った。

「このヘボ。ロン、デメルザの顔見てよ！」デメルザの隣に着地して膨れ上がった唇を調べながら、ジニーが怒鳴り続けた。

「僕が治すよ」

ハリーは二人のそばに着地し、デメルザの口に杖を向けて唱えた。

「『エписキー<唇癒えよ>』。それから、ジニー、ロンのことをヘボなんて呼ぶな。君はチームのキャプテンじゃないんだしー」

「あら、あなたが忙しすぎて、ロンのことをヘボ呼ばわりできないみたいだったから、誰かがそうしなくちゃって思ってー」

ハリーは噴き出したいのをこらえた。

「みんな、空へ。さあ、行こう……」

全体的に、練習は今学期最悪の一つだった。しかしハリーは、これだけ試合が迫ったこの時期に、ばか正直は最善の策ではないと思った。

「みんな、いいプレイだった。スリザリンをペしゃんこにできるぞ」

ハリーは激励した。

チェイサーとビーターは、自分のプレイにまあまあ満足した顔で更衣室を出た。

「僕のプレイ、ドラゴンのクソ山盛りみたいだった」

ジニーが出て行って、ドアが閉まったとたん、ロンが虚ろな声で言った。

「そうじゃないさ」ハリーがきっぱりと言った。

「ロン、選抜した中で、君が一番いいキーパーなんだ。唯一の問題は君の精神面さ」城に帰るまでずっと、ハリーは怒涛のごとく激励し続け、城の三階まで戻ったときには、ロンはほんの少し元気が出たようだった。ところが、グリフィンドール塔に戻るいつも

old insecurities. After letting in half a dozen goals, most of them scored by Ginny, his technique became wilder and wilder, until he finally punched an oncoming Demelza Robins in the mouth.

“It was an accident, I’m sorry, Demelza, really sorry!” Ron shouted after her as she zigzagged back to the ground, dripping blood everywhere. “I just —”

“Panicked,” Ginny said angrily, landing next to Demelza and examining her fat lip. “You prat, Ron, look at the state of her!”

“I can fix that,” said Harry, landing beside the two girls, pointing his wand at Demelza’s mouth, and saying “*Episkey*.” “And Ginny, don’t call Ron a prat, you’re not the Captain of this team —”

“Well, you seemed too busy to call him a prat and I thought someone should —”

Harry forced himself not to laugh.

“In the air, everyone, let’s go. ...”

Overall it was one of the worst practices they had had all term, though Harry did not feel that honesty was the best policy when they were this close to the match.

“Good work, everyone, I think we’ll flatten Slytherin,” he said bracingly and the Chasers and Beaters left the changing room looking reasonably happy with themselves.

“I played like a sack of dragon dung,” said Ron in a hollow voice when the door had swung shut behind Ginny.

“No, you didn’t,” said Harry firmly. “You’re the best Keeper I tried out, Ron. Your only problem is nerves.”

の近道を通ろうと、ハリーがタペストリーを押し開けたとき、二人は、ディーンとジニーが固く抱き合って、糊づけされたように激しくキスしている姿を目撃してしまった。大きくて鱗だらけの何かが、ハリーの胃の中で目を覚まし、胃壁に爪を立てているような気がした。

頭にカッと血が上り、思慮分別が吹っ飛んで、ディーンに呪いをかけてぐにゃぐにゃのゼリーの塊にしてやりたいという野蛮な衝動で一杯になった。

突然の狂気と戦いながら、ハリーはロンの声を遠くに聞いた。

「おい！」

ディーンとジニーが離れて振り返った。

「何なの？」ジニーが言った。

「自分の妹が、公衆の面前でいちゃいちゃしているのを見たくないね！」

「あなたたちが邪魔するまでは、ここには誰もいなかったわ！」ジニーが言った。

ディーンは気まずそうな顔だった。ばつが悪そうにニヤッとハリーに笑いかけたが、ハリーは笑い返さなかった。

新しく生まれた体内の怪物が、ディーンを即刻チームから退団させろと喚いていた。

「あ……ジニー、来いよ」ディーンが言った。

「談話室に帰ろう……」

「先に帰って！」ジニーが言った。

「わたしは大好きなお兄様とお話があるの！」

ディーンは、その場に未練はない、という顔でいなくなった。

「さあ」

ジニーが長い赤毛を顔から振り払い、ロンを睨みつけた。

「はっきり白黒をつけましょう。わたしが誰と、つき合おうと、その人と何をしようと、ロン、あなたには関係ないわ……」

「あるさ！」ロンも同じぐらい腹を立てていた。

「嫌だね、みんなが僕の妹のことを何て呼ぶか——」

「何て呼ぶの？」ジニーが杖を取り出した。

「何て呼ぶって言うの？」

He kept up a relentless flow of encouragement all the way back to the castle, and by the time they reached the second floor, Ron was looking marginally more cheerful. When Harry pushed open the tapestry to take their usual shortcut up to Gryffindor Tower, however, they found themselves looking at Dean and Ginny, who were locked in a close embrace and kissing fiercely as though glued together.

It was as though something large and scaly erupted into life in Harry's stomach, clawing at his insides: Hot blood seemed to flood his brain, so that all thought was extinguished, replaced by a savage urge to jinx Dean into a jelly. Wrestling with this sudden madness, he heard Ron's voice as though from a great distance away.

“Oi!”

Dean and Ginny broke apart and looked around.

“What?” said Ginny.

“I don't want to find my own sister snogging people in public!”

“This was a deserted corridor till you came butting in!” said Ginny.

Dean was looking embarrassed. He gave Harry a shifty grin that Harry did not return, as the newborn monster inside him was roaring for Dean's instant dismissal from the team.

“Er ... c'mon, Ginny,” said Dean, “let's go back to the common room. ...”

“You go!” said Ginny. “I want a word with my dear brother!”

Dean left, looking as though he was not

「ジニー、ロンは別に他意はないんだー」
ハリーは反射的にそう言ったが、怪物はロンの言葉を支持して吠え猛っていた。
「いいえ、他意があるわ!」
ジニーはメラメラ燃え上がり、ハリーに向かって怒鳴った。
「自分がまだ、一度もいちゃついたことがないから、自分がもらった最高のキスが、ミュリエルお婆さんのキスだからー」
「黙れ!」ロンは赤をすっ飛ばして濃茶色の顔で大声を出した。
「黙らないわ!」ジニーも我を忘れて叫んだ。
「あなたがヌラーと一緒にいるところを、わたし、いつも見てたわ。彼女を見るたびに、頬っぺたにキスしてくれないかって、あなたはそう思った。情けないわ!世の中に出て、少しは自分でもいちゃついてみなさいよ!そしたら、ほかの人がやってもそんなに気にならないでしょうよ!」
ロンも杖を引っぱり出した。ハリーは二人の間に割って入った。
「自分が何を言ってるか、わかってないな!」
ロンは、両手を広げて立ちふさがっているハリーを避けて、まっすぐにジニーを狙おうとしながら吠えた。
「僕が公衆の面前でやらないからといってー!」
ジニーは嘲るようにヒステリックに笑い、ハリーを押し退けた。
「ビッグウィジョンにでもキスしてたの?それともミュリエルお婆さんの写真を枕の下にでも入れてるの?」
「こいつめー」
オレンジ色の閃光が、ハリーの左腕の下を通り、わずかにジニーを逸れた。
ハリーはロンを壁に押しつけた。
「バカなことはやめろ……」
「ハリーはチョウ・チャンとキスしたわ!」
ジニーはいまにも泣き出しそうな声で叫んだ。
「それに、ハーマイオニーはピクトール・クラムとキスした。ロン、あなただけが、それが何だかいやらしいもののよう振舞うの

sorry to depart the scene.

“Right,” said Ginny, tossing her long red hair out of her face and glaring at Ron, “let’s get this straight once and for all. It is none of your business who I go out with or what I do with them, Ron —”

“Yeah, it is!” said Ron, just as angrily. “D’you think I want people saying my sister’s a —”

“A what?” shouted Ginny, drawing her wand. “A *what*, exactly?”

“He doesn’t mean anything, Ginny —” said Harry automatically, though the monster was roaring its approval of Ron’s words.

“Oh yes he does!” she said, flaring up at Harry. “Just because *he’s* never snogged anyone in his life, just because the best kiss *he’s* ever had is from our Auntie Muriel —”

“Shut your mouth!” bellowed Ron, bypassing red and turning maroon.

“No, I will not!” yelled Ginny, beside herself. “I’ve seen you with Phlegm, hoping she’ll kiss you on the cheek every time you see her, it’s pathetic! If you went out and got a bit of snogging done yourself, you wouldn’t mind so much that everyone else does it!”

Ron had pulled out his wand too; Harry stepped swiftly between them.

“You don’t know what you’re talking about!” Ron roared, trying to get a clear shot at Ginny around Harry, who was now standing in front of her with his arms outstretched. “Just because I don’t do it in public — !”

Ginny screamed with derisive laughter, trying to push Harry out of the way.

よ。あなたが十二歳の子ども並みの経験しかないからだわ!」

その捨て台詞とともに、ジニーは嵐のように荒れ狂って去っていった。

ハリーはすぐにロンを放した。ロンは殺気立っていた。

二人は荒い息をしながら、そこに立っていた。

そこへフィルチの飼い猫のミセス・ノリスが、物陰から現れ、張りつめた空気を破った。

「行こう」

フィルチが不恰好にドタドタ歩く足音が耳に入ったので、ハリーが言った。

二人は階段を上り、八階の廊下を急いだ。

「おい、どけよ!」

ロンが小さな女の子を怒鳴りつけると、女の子はびっくり仰天して飛び上がり、ヒキガエルの卵の瓶を落とした。

ハリーはガラスの割れる音もほとんど気づかなかった。

右も左もわからなくなり、眩暈がした。雷に撃たれるというのは、きっとこんな感じなのだろう。

ロンの妹だからなんだ、とハリーは自分に言い聞かせた。

ディーンにキスしているところを見たくなかったのは、単に、ジニーがロンの妹だからなんだ……。

しかし、頼みもしないのに、ある幻想がハリーの心に忍び込んだ。

あの同じ人気のない廊下で、自分がジニーにキスしている……胸の怪物が満足げに喉を鳴らした……そのとき、ロンがタペストリーのカーテンを荒々しく開け、杖を取り出してハリーに向かって叫ぶ。

「信頼を裏切った」……「友達だと思ったのに」……。

「ハーマイオニーはグラムにキスしたと思うか?」

「太った婦人」に近づいたとき、唐突にロンが問いかけた。

ハリーは後ろめたい気持でドキリとし、ロンが踏み込む前の廊下の幻想を追い払った。

ジニーと二人きりの廊下の幻想を――。

“Been kissing Pigwidgeon, have you? Or have you got a picture of Auntie Muriel stashed under your pillow?”

“You――”

A streak of orange light flew under Harry’s left arm and missed Ginny by inches; Harry pushed Ron up against the wall.

“Don’t be stupid――”

“Harry’s snogged Cho Chang!” shouted Ginny, who sounded close to tears now. “And Hermione snogged Viktor Krum, it’s only you who acts like it’s something disgusting, Ron, and that’s because you’ve got about as much experience as a twelve-year-old!”

And with that, she stormed away. Harry quickly let go of Ron; the look on his face was murderous. They both stood there, breathing heavily, until Mrs. Norris, Filch’s cat, appeared around the corner, which broke the tension.

“C’m on,” said Harry, as the sound of Filch’s shuffling feet reached their ears.

They hurried up the stairs and along a seventh-floor corridor. “Oi, out of the way!” Ron barked at a small girl who jumped in fright and dropped a bottle of toadspawn.

Harry hardly noticed the sound of shattering glass; he felt disoriented, dizzy; being struck by a lightning bolt must be something like this. *It’s just because she’s Ron’s sister*, he told himself. *You just didn’t like seeing her kissing Dean because she’s Ron’s sister.* ...

But unbidden into his mind came an image of that same deserted corridor with himself kissing Ginny instead. ... The monster in his chest purred ... but then he saw Ron ripping open the tapestry curtain and drawing his wand

「えっ？」ハリーはぼうっとしたまま言った。

「ああ……んー……」正直に答えれば「そう思う」だった。

しかし、そうは言いたくなかった。

しかし、ロンは、ハリーの表情から、最悪の事態を察したようだった。

「ディリグロウト」

ロンは暗い声で「太った婦人」に言った。

そして二人は、肖像画の穴を通り、談話室に入った。

二人とも、ジニーのこともハーマイオニーのことも、二度と口にしなかった。

事実その夜は、二人とも互いにほとんど口をさかず、それぞれの思いに耽りながら、黙ってベッドに入った。

ハリーは、長いこと目が冴えて四本柱のベッドの天蓋を見つめながら、ジニーへの感情はまったく兄のようなものだ、自分を納得させようとした。

この夏中、兄と妹のように暮らしたではないか？ クイディッチをしたり、ロンをからかったり、ビルとヌラーのことで笑ったり。

ハリーは何年も前からジニーのことを知っていた……保護者のような気持になるのは、自然なことだ……ジニーのために目を光らせるようになるのは当然だ……ジニーにキスしたことで、ディーンの手足をバラバラに引き裂いてやりたいのも……いや、だめだ……兄としてのそういう特別の感情を、抑制しなければ…

…。

ロンがブーッと大きくいびきをかいた。ジニーはロンの妹だ。

ハリーはしっかり自分に言い聞かせた。

ロンの味なんだ。

近づいてはいけない人だ。

どんなことがあっても、自分はロンとの友情を危険にさらしはしないだろう。

何しろロンはハリーが初めて得た友人だ。

ハリーは枕を叩いてもっと心地よい形に整え、自分の想いがジニーの近くに迷い込まないように必死に努力しながら、眠気が襲うのを待った。

次の朝目が覚めたとき、ハリーは少しぼーっとしていた。

on Harry, shouting things like “betrayal of trust” ... “supposed to be my friend” ...

“D’you think Hermione did snog Krum?” Ron asked abruptly, as they approached the Fat Lady. Harry gave a guilty start and wrenched his imagination away from a corridor in which no Ron intruded, in which he and Ginny were quite alone —

“What?” he said confusedly. “Oh ... er ...”

The honest answer was “yes,” but he did not want to give it. However, Ron seemed to gather the worst from the look on Harry’s face.

“Dilligrout,” he said darkly to the Fat Lady, and they climbed through the portrait hole into the common room.

Neither of them mentioned Ginny or Hermione again; indeed, they barely spoke to each other that evening and got into bed in silence, each absorbed in his own thoughts.

Harry lay awake for a long time, looking up at the canopy of his four-poster and trying to convince himself that his feelings for Ginny were entirely elder-brotherly. They had lived, had they not, like brother and sister all summer, playing Quidditch, teasing Ron, and having a laugh about Bill and Phlegm? He had known Ginny for years now. ... It was natural that he should feel protective ... natural that he should want to look out for her ... want to rip Dean limb from limb for kissing her ... No ... he would have to control that particular brotherly feeling. ...

Ron gave a great grunting snore.

She’s Ron’s sister, Harry told himself firmly. *Ron’s sister. She’s out-of-bounds.* He would not risk his friendship with Ron for

ロンがビーターの梶棒を持ってハリーを追いかけてくる一連の夢を見て、頭が混乱していたが、昼ごろには、夢のロンと現実のロンを取り替えられたらいいのに、と思うようになっていた。

ロンはジニーとディーンを冷たく無視したばかりでなく、ハーマイオニーをも氷のように冷たい意地悪さで無視し、ハーマイオニーはわけがわからず傷ついた。

その上、ロンは一夜にして平均的な「尻尾爆発スクリュート」のようになり、爆発寸前で、いまにも尻尾で打ちかかってきそうだった。

ハリーは、ロンとハーマイオニーを仲直りさせようと、一日中努力したがムダだった。

とうとう、ハーマイオニーは、いたく憤慨して寝室へと去り、ロンは、自分に眼をつけたと言って、怯える一年生の何人かを怒鳴くつけて悪態をついた未、肩怒らせて男子寮に歩いていった。

ロンの攻撃性が数日経っても治まらなかったのには、ハリーも愕然とした。

さらに悪いことに、時を同じくしてキーパーとしての技術が一段と落ち込み、ロンはますます攻撃的になった。土曜日の試合を控えた最後のクイディッチの練習では、チェイサーがロンめがけて放つゴールシュートを、一つとして防げなかった。

それなのに誰かれかまわず大声で怒鳴りつけ、とうとうデメルザ・ロピンズを泣かせてしまった。

「黙れよ。デメルザをかまうな！」

ピークスが叫んだ。

ロンの背丈の三分の二しかなくとも、ピークスにはもちろん重い梶棒があった。

「いい加減にしろ！」

ハリーが声を張り上げた。

ジニーがロンの方向を睨みつけているのを見たハリーは、ジニーが「コウモリ鼻糞の呪い」の達人だという評判を思い出し、手に負えない結果になる前にと、飛び上がって間に入った。

「ピークス、戻ってブラッジャーをしまってくれ。デメルザ、しっかりしろ、今日のプレイはとてもよかったぞ。ロン……」

anything. He punched his pillow into a more comfortable shape and waited for sleep to come, trying his utmost not to allow his thoughts to stray anywhere near Ginny.

Harry awoke next morning feeling slightly dazed and confused by a series of dreams in which Ron had chased him with a Beater's bat, but by midday he would have happily exchanged the dream Ron for the real one, who was not only cold-shouldering Ginny and Dean, but also treating a hurt and bewildered Hermione with an icy, sneering indifference. What was more, Ron seemed to have become, overnight, as touchy and ready to lash out as the average Blast-Ended Skrewt. Harry spent the day attempting to keep the peace between Ron and Hermione with no success; finally, Hermione departed for bed in high dudgeon, and Ron stalked off to the boys' dormitory after swearing angrily at several frightened first years for looking at him.

To Harry's dismay, Ron's new aggression did not wear off over the next few days. Worse still, it coincided with an even deeper dip in his Keeping skills, which made him still more aggressive, so that during the final Quidditch practice before Saturday's match, he failed to save every single goal the Chasers aimed at him, but bellowed at everybody so much that he reduced Demelza Robins to tears.

"You shut up and leave her alone!" shouted Peakes, who was about two-thirds Ron's height, though admittedly carrying a heavy bat.

"ENOUGH!" bellowed Harry, who had seen Ginny glowering in Ron's direction and, remembering her reputation as an accomplished caster of the Bat-Bogey Hex, soared

ハリーは、ほかの選手が声の届かないところまで行くのを待ってから、言葉が続けた。

「君は僕の親友だ。だけどほかのメンバーにあんなふうな態度を取り続けるなら、僕は君をチームから追い出す」

一瞬ハリーは、ロンが自分を殴るのではないかと本気でそう思った。しかし、もっと悪いことが起こった。

ロンは箒の上にぺちゃっとつぶれたように見えた。闘志がすっかり消え失せていた。

「僕、やめる。僕って最低だ」

「君は最低なんかじゃないし、やめない！」
ハリーはロンの胸倉をつかんで激しい口調で言った。

「好調なときは、君は何だって止められる。精神の問題だ！」

「僕のこと、弱虫だって言うのか？」

「ああ、そうかもしれない！」

一瞬、二人は睨み合った。そして、ロンが疲れたように頭を振った。

「別なキーパーを見つける時間がないことはわかってる。だから、明日はプレイするよ。だけど、もし負けたら、それに負けるに決まってるけど、僕はチームから身を引く」
ハリーが何と言っても事態は変わらなかった。

夕食の間中、ハリーはロンの自信を高めようと努力したが、ロンはハーマイオニーに意地の悪い不機嫌な態度を取ることに忙しくて、気づいてくれなかった。

ハリーはその晩、談話室でもがんばったが、ロンがチームを抜けたらチーム全体が落胆するだろうというハリーの説もどうやら怪しくなってきた。

ほかの選手たちが部屋の隅に集合して、間違いなくロンについてブツブツ文句を言い、陰悪な目つきでロンを見たりしていたのだ。

とうとうハリーは、こんどは怒ってみて、ロンを挑発しようとした。

闘争心に火をつけ、うまくいけばゴールを守れる態度にまで持っていこうとしたのだが、この戦略も、激励より効果が上がったようには見えなかった。

ロンは相変わらず絶望し、しょげきって寝室に戻った。

over to intervene before things got out of hand. “Peakes, go and pack up the Bludgers. Demelza, pull yourself together, you played really well today. Ron ...” he waited until the rest of the team were out of earshot before saying it, “you’re my best mate, but carry on treating the rest of them like this and I’m going to kick you off the team.”

He really thought for a moment that Ron might hit him, but then something much worse happened: Ron seemed to sag on his broom; all the fight went out of him and he said, “I resign. I’m pathetic.”

“You’re not pathetic and you’re not resigning!” said Harry fiercely, seizing Ron by the front of his robes. “You can save anything when you’re on form, it’s a mental problem you’ve got!”

“You calling me mental?”

“Yeah, maybe I am!”

They glared at each other for a moment, then Ron shook his head wearily. “I know you haven’t got any time to find another Keeper, so I’ll play tomorrow, but if we lose, and we will, I’m taking myself off the team.”

Nothing Harry said made any difference. He tried boosting Ron’s confidence all through dinner, but Ron was too busy being grumpy and surly with Hermione to notice. Harry persisted in the common room that evening, but his assertion that the whole team would be devastated if Ron left was somewhat undermined by the fact that the rest of the team was sitting in a huddle in a distant corner, clearly muttering about Ron and casting him nasty looks. Finally Harry tried getting angry again in the hope of provoking Ron into a

ハリーは、長いこと暗い中で目を開けていた。来るべき試合に負けたくなかった。キャプンとして最初の試合だからということだけではない。

ドラコ・マルフォイへの疑惑をまだ証明することはできなかったが、せめてクィディッチでは、マルフォイを絶対打ち破ると決心していたからだ。

しかし、ロンのプレイがここ数回の練習と同じ調子なら、勝利の可能性は非常に低い……。

何かロンの気持を引き立たせるものがありさえすれば……絶好調でプレイさせることができれば……ロンにとって本当にいい目なのだと保証する何かがあれば……。

すると、その答えが、一発で、急に輝かしい啓示となって閃いた。

次の日の朝食は、例によって前哨戦だった。スリザリン生はグリフィンボール・チームの選手が大広間に入ってくるたびに、一人ひとりに野次とブーイングを浴びせた。

ハリーが天井をちらりと見ると、晴れた薄青の空だった。

幸先がいい。

グリフィンボールのテーブルは赤と金色の塊となって、ハリーとロンが近づくのを歓声で迎えた。

ハリーはニヤッと笑って手を振ったが、ロンは弱々しく顔をしかめ、頭を振った。

「元気を出して、ロン！」ラベンダーが遠くから声をかけた。

「あなた、きっとすばらしいわ！」

ロンはラベンダーを無視した。

「紅茶か？」ハリーがロンに聞いた。

「コーヒーか？ かぼちゃジュースか？」

「何でもいい」

ロンはむっつりとトーストを一口噛み、ふさぎ込んで言った。

数分後にハーマイオニーがやって来た。

ロンの最近の不愉快な行動に、すっかり嫌気が差したハーマイオニーは、二人とは別に朝食に下りてきたのだが、テーブルに着く途中で足を止めた。

「二人とも、調子はどう？」ロンの後頭部を見ながら、ハーマイオニーが遠慮がちに問い

defiant, and hopefully goal-saving, attitude, but this strategy did not appear to work any better than encouragement; Ron went to bed as dejected and hopeless as ever.

Harry lay awake for a very long time in the darkness. He did not want to lose the upcoming match; not only was it his first as Captain, but he was determined to beat Draco Malfoy at Quidditch even if he could not yet prove his suspicions about him. Yet if Ron played as he had done in the last few practices, their chances of winning were very slim. ...

If only there was something he could do to make Ron pull himself together ... make him play at the top of his form ... something that would ensure that Ron had a really good day. ...

And the answer came to Harry in one, sudden, glorious stroke of inspiration.

Breakfast was the usual excitable affair next morning; the Slytherins hissed and booed loudly as every member of the Gryffindor team entered the Great Hall. Harry glanced at the ceiling and saw a clear, pale blue sky: a good omen.

The Gryffindor table, a solid mass of red and gold, cheered as Harry and Ron approached. Harry grinned and waved; Ron grimaced weakly and shook his head.

“Cheer up, Ron!” called Lavender. “I know you’ll be brilliant!”

Ron ignored her.

“Tea?” Harry asked him. “Coffee? Pumpkin juice?”

“Anything,” said Ron glumly, taking a moody bite of toast.

た。

「いいよ」

ハリーは、ロンにかぼちゃジュースのグラスを渡すほうに気を取られながら、そう答えた。

「ほら、ロン、飲めよ」

ロンはグラスを口元に持っていった。

そのときハーマイオニーが鋭い声を上げた。

「ロン、それ飲んじゃダメ！」ハリーもロンも、ハーマイオニーを見上げた。

「どうして？」ロンが開いた。

ハーマイオニーは、自分の目が信じられないという顔で、ハリーをまじまじと見ていた。

「あなた、いま、その飲み物に何か入れたわ」

「何だって？」ハリーが問い返した。

「聞こえたはずよ。私見たわよ。ロンの飲み物に、いま何か注いだわ。いま、手にその瓶を持っているはずよ！」

「何を言ってるのかわからないな」ハリーは、急いで小さな瓶をポケットにしまいながら言った。

「ロン、危ないわ。それを飲んじゃダメ！」ハーマイオニーが、警戒するようにまた言った。

しかしロンは、グラスを取り上げて一気に飲み干した。

「ハーマイオニー、僕に命令するのはやめてくれ」

ハーマイオニーは何て破廉恥なという顔をして屈み込み、ハリーにだけ聞こえるように囁き声で非難した。

「あなた、退校処分になるべきだわ。ハリー、あなたがそんなことする人だとは思わなかったわ！」

「自分のことは棚に上げて」ハリーが囁き返した。

「最近誰かさんを『錯乱』させやしませんでしたか？」

ハーマイオニーは、荒々しく二人から離れて、席に着いた。

ハリーはハーマイオニーが去っていくのを見ても後悔しなかった。

クイディッチがいかにか真剣勝負であるかを、ハーマイオニーは心から理解したことがない

A few minutes later Hermione, who had become so tired of Ron's recent unpleasant behavior that she had not come down to breakfast with them, paused on her way up the table.

"How are you both feeling?" she asked tentatively, her eyes on the back of Ron's head.

"Fine," said Harry, who was concentrating on handing Ron a glass of pumpkin juice. "There you go, Ron. Drink up."

Ron had just raised the glass to his lips when Hermione spoke sharply.

"Don't drink that, Ron!"

Both Harry and Ron looked up at her.

"Why not?" said Ron.

Hermione was now staring at Harry as though she could not believe her eyes.

"You just put something in that drink."

"Excuse me?" said Harry.

"You heard me. I saw you. You just tipped something into Ron's drink. You've got the bottle in your hand right now!"

"I don't know what you're talking about," said Harry, stowing the little bottle hastily in his pocket.

"Ron, I warn you, don't drink it!" Hermione said again, alarmed, but Ron picked up the glass, drained it in one gulp, and said, "Stop bossing me around, Hermione."

She looked scandalized. Bending low so that only Harry could hear her, she hissed, "You should be expelled for that. I'd never have believed it of you, Harry!"

"Hark who's talking," he whispered back.

んだ。

それからハリーは、舌戟めずりしているロンに顔を向けた。

「そろそろ時間だ」ハリーは快活に言った。競技場に向かう二人の足下で、凍りついた草が音を立てた。

「こんなにいい天気なのは、ラッキーだな、え？」ハリーがロンに声をかけた。

「ああ」ロンは半病人のような青い顔で答えた。

ジニーとデメルザは、もうクイディッチのユニフォームに着替え、更衣室で待機していた。

「最高のコンディションだわ」ジニーがロンを無視して言った。

「それに、何があったと思う？ あのスリザリンのチェイサーのベイジーー昨日練習中に、頭にブラッジャーを食らって、痛くてプレイできないんですって！それに、もっといいことがあるの……マルフォイも病気で休場！」

「何だって？」

ハリーはいきなり振り向いてジニーを見つめた。

「あいつが、病気？どこが悪いんだ？」

「さあね。でもわたしたちにとってはいいことだわ」ジニーが明るく言った。

「向こうは、代わりにハーバーがプレイする。わたしと同学年で、あいつ、バカよ」ハリーは曖昧に笑いを返したが、真紅のユニフォームに着替えながら、心はクイディッチからまるで離れていた。

マルフォイは前に怪我を理由にプレイできないと主張したことがあった。

あのときは、全試合のスケジュールがスリザリンに有利になるように変更されるのを狙ったものだった。

こんどは、なぜ代理を立てても満足なのだろう？ 本当に病気なのか、それとも仮病なのか「怪しい、だろ？」ハリーは声をひそめてロンに言った。

「マルフォイがプレイしないなんて」

「僕ならラッキー、と言うね」ロンは少し元気になったようだった。

「それにベイジーーも休場だ。あっちのチーム

“Confunded anyone lately?”

She stormed up the table away from them. Harry watched her go without regret. Hermione had never really understood what a serious business Quidditch was. He then looked around at Ron, who was smacking his lips.

“Nearly time,” said Harry blithely.

The frosty grass crunched underfoot as they strode down to the stadium.

“Pretty lucky the weather’s this good, eh?” Harry asked Ron.

“Yeah,” said Ron, who was pale and sick-looking.

Ginny and Demelza were already wearing their Quidditch robes and waiting in the changing room.

“Conditions look ideal,” said Ginny, ignoring Ron. “And guess what? That Slytherin Chaser Vaisey — he took a Bludger in the head yesterday during their practice, and he’s too sore to play! And even better than that — Malfoy’s gone off sick too!”

“What?” said Harry, wheeling around to stare at her. “He’s ill? What’s wrong with him?”

“No idea, but it’s great for us,” said Ginny brightly. “They’re playing Harper instead; he’s in my year and he’s an idiot.”

Harry smiled back vaguely, but as he pulled on his scarlet robes his mind was far from Quidditch. Malfoy had once before claimed he could not play due to injury, but on that occasion he had made sure the whole match was rescheduled for a time that suited the Slytherins better. Why was he now happy to let

の得点王だぜ。僕はあいつと対抗したいとは——おい！」

キーパーのグローブを着ける途中で、ロンは急に動きを止め、ハリーをじっと見た。

「何だ？」

「僕……君……」

ロンは声を落とし、怖さと興奮とが入り交じった顔をした。

「僕の飲み物……かぼちゃジュース……君、もしや……？」

ハリーは眉を吊り上げただけで、それには答えず、こう言った。

「あと五分ほどで試合開始だ。ブーツを履いたほうがいいぜ」

選手は、歓声とブーイングの湧き上がる競技場に進み出た。

スタンドの片側は赤と金色一色、反対側は一面の緑と銀色だった。

ハッフルパフ生とレイブンクロー生の多くも、どちらかに味方した。

叫び声と拍手の最中、ルーナ・ラブグッドの有名な獅子頭帽子の咆哮が、ハリーにははっきりと聞き取れた。

ハリーは、ボールを木箱から放す用意をして待っている、レフェリーのマダム・フーチのところへ進んだ。

「キャプテン、握手」マダム・フーチが言った。

ハリーは新しいスリザリンのキャプテン、ウルクハートに片手を握りつぶされた。

「箒に乗って。ホイッスルの合図で……一……二……三……」

ホイッスルが鳴り、ハリーも選手たちも凍った地面を強く蹴った。試合開始だ。

ハリーは競技場の円周を回るように飛び、スニッチを探しながら、ずっと下をジグザグに飛んでいるハーバーを監視した。

すると、いつもの解説者とは水と抽ほどに不調和な声が聞こえてきた。

「さあ、始めました。今年ポッターが組織したチームには、我々全員が驚いたと思います。ロナルド・ウィーズリーは去年、キーパーとしてむらがあったので、多くの人がロンはチームからはずされると思ったわけですが、もちろん、キャプテンとの個人的な友情

a substitute go on? Was he really ill, or was he faking?

“Fishy, isn’t it?” he said in an undertone to Ron. “Malfoy not playing?”

“Lucky, I call it,” said Ron, looking slightly more animated. “And Vaisey off too, he’s their best goal scorer, I didn’t fancy — hey!” he said suddenly, freezing halfway through pulling on his Keeper’s gloves and staring at Harry.

“What?”

“I ... you ...” Ron had dropped his voice, he looked both scared and excited. “My drink ... my pumpkin juice ... you didn’t ... ?”

Harry raised his eyebrows, but said nothing except, “We’ll be starting in about five minutes, you’d better get your boots on.”

They walked out onto the pitch to tumultuous roars and boos. One end of the stadium was solid red and gold; the other, a sea of green and silver. Many Hufflepuffs and Ravensclaws had taken sides too: Amidst all the yelling and clapping Harry could distinctly hear the roar of Luna Lovegood’s famous lion-topped hat.

Harry stepped up to Madam Hooch, the referee, who was standing ready to release the balls from the crate.

“Captains shake hands,” she said, and Harry had his hand crushed by the new Slytherin Captain, Urquhart. “Mount your brooms. On the whistle ... three ... two ... one ...”

The whistle sounded, Harry and the others kicked off hard from the frozen ground, and they were away.

Harry soared around the perimeter of the grounds, looking around for the Snitch and

が役に立ちました……」

解説の言葉は、スリザリン側からの野次と拍手で迎えられた。

ハリーは箒から首を伸ばし、解説者の演台を見た。

痩せて背の高い、鼻がつんと上を向いたブロンドの青年がそこに立ち、かつてはリー・ジョーダンの物だった魔法のメガホンに向かってしゃべっていた。

ハッフルパフの選手で、ハリーが心底嫌いなザカリウス・スミスだとわかった。

「あ、スリザリンが最初のゴールを狙います。ウルクハートが競技場を矢のように飛んでいきます。そして——」ハリーの胃が引っ繰り返った。

「——ウィーズリーがセーブしました。まあ、ときにはラッキーなこともあるでしょう。たぶん……」

「そのとおりだ、スミス。ラッキーさ」

ハリーはひとりでニヤニヤしながら呟き、チェイサーたちの間に飛び込んで、逃げ足の速いスニッチの手がかりを探してあたりに目を配った。

ゲーム開始後三十分が経ち、グリフィンドールは六〇対ゼロでリードしていた。

ロンは本当に目を見張るような守りを何度も見せ、何回かはグローブのほんの先端で守ったこともあった。

そしてジニーはグリフィンドールの六回のゴールシュート中、四回を得点していた。

これでザカリウスは、ウィーズリー兄妹がハリーの依怙贔屓のおかげでチームに入ったのではないかと、声高に言うことが事実上できなくなり、代わりにピークスとクートを槍玉に挙げ出した。

「もちろん、クートはピーターとしての普通の体型とは言えません」

ザカリウスは高慢ちきに言った。

「ピーターたるものは普通もっと筋肉が——」

「あいつにブラッジャーを打ってやれ！」

クートがそばを飛び抜けたとき、ハリーが声をかけたが、クートはニヤリと笑って、次のブラッジャーで、ちょうどハリーとすれ違ったハーバーを狙った。

keeping one eye on Harper, who was zigzagging far below him. Then a voice that was jarringly different to the usual commentator's started up.

“Well, there they go, and I think we're all surprised to see the team that Potter's put together this year. Many thought, given Ronald Weasley's patchy performance as Keeper last year, that he might be off the team, but of course, a close personal friendship with the Captain does help. ...”

These words were greeted with jeers and applause from the Slytherin end of the pitch. Harry craned around on his broom to look toward the commentator's podium. A tall, skinny blond boy with an upturned nose was standing there, talking into the magical megaphone that had once been Lee Jordan's; Harry recognized Zacharias Smith, a Hufflepuff player whom he heartily disliked.

“Oh, and here comes Slytherin's first attempt on goal, it's Urquhart streaking down the pitch and ——”

Harry's stomach turned over.

“— Weasley saves it, well, he's bound to get lucky sometimes, I suppose. ...”

“That's right, Smith, he is,” muttered Harry, grinning to himself, as he dived amongst the Chasers with his eyes searching all around for some hint of the elusive Snitch.

With half an hour of the game gone, Gryffindor were leading sixty points to zero, Ron having made some truly spectacular saves, some by the very tips of his gloves, and Ginny having scored four of Gryffindor's six goals. This effectively stopped Zacharias wondering

ブラッジャーが標的に当たったことを意味するゴツンという鈍い音を聞いて、ハリーは喜んだ。

グリフィンドールは破竹の勢いだった。続けざまに得点し、競技場の反対側ではロンが続けざまに、いとも簡単にゴールをセーブした。

いまやロンは笑顔になっていた。

とくに見事なセーブは、観衆があのお気に入りの応援歌「ウィーズリーはわが王者」のコーラスで迎え、ロンは高いところから指揮するまねをした。

「あいつは今日、自分が特別だと思っているようだな？」

意地の悪い声が出て、ハリーは危うく箒から叩き落とされそうになった。

ハーバーが故意にハリーに体当たりしたのだ。

「おまえのダチ、血を裏切る者め……」

マダム・フーチは背中を向けていた。

下でグリフィンドール生が怒って叫んだが、マダム・フーチが振り返ってハーバーを見たときには、とっくに飛び去ってしまっていた。

ハリーは肩の痛みをこらえて、ハーバーのあとを追いかけた。

ぶつかり返してやる……。

「さあ、スリザリンのハーバー、スニッチを見つけたようです！」ザカリアス・スミスがメガホンを通してしゃべった。

「そうです。間違いなく、ポッターが見ていない何かを見ました！」

スミスはまったくアホウだ、とハリーは思った。

二人が衝突したのに気づかなかったのか？しかし次の瞬間、ハリーは自分の胃袋が空から落下したような気がした——スミスが正しくてハリーが間違っていた。

ハーバーは、やみくもに飛ばしていたわけではなかった。

ハリーが見つけれなかった物を見つけたのだ。

スニッチは、二人の頭上のまっ青に澄んだ空に、眩しく輝きながら高々と飛んでいた。

ハリーは加速した。

loudly whether the two Weasleys were only there because Harry liked them, and he started on Peakes and Coote instead.

“Of course, Coote isn’t really the usual build for a Beater,” said Zacharias loftily, “they’ve generally got a bit more muscle —”

“Hit a Bludger at him!” Harry called to Coote as he zoomed past, but Coote, grinning broadly, chose to aim the next Bludger at Harper instead, who was just passing Harry in the opposite direction. Harry was pleased to hear the dull thunk that meant the Bludger had found its mark.

It seemed as though Gryffindor could do no wrong. Again and again they scored, and again and again, at the other end of the pitch, Ron saved goals with apparent ease. He was actually smiling now, and when the crowd greeted a particularly good save with a rousing chorus of the old favorite “Weasley Is Our King,” he pretended to conduct them from on high.

“Thinks he’s something special today, doesn’t he?” said a snide voice, and Harry was nearly knocked off his broom as Harper collided with him hard and deliberately. “Your blood-traitor pal ...”

Madam Hooch’s back was turned, and though Gryffindors below shouted in anger, by the time she looked around, Harper had already sped off. His shoulder aching, Harry raced after him, determined to ram him back. ...

“And I think Harper of Slytherin’s seen the Snitch!” said Zacharias Smith through his megaphone. “Yes, he’s certainly seen something Potter hasn’t!”

風が耳元でヒューヒューと鳴り、スミスの解説も観衆の声も掻き消してしまった。

しかしハーバーはまだハリーの先を飛び、グリフィンドールはまだ一〇〇点しか先行していない。

ハーバーが先に目標に着けば、グリフィンドールは負ける……そしていま、ハーバーは目標まであと数十センチと迫り、手を伸ばした……。

「おい、ハーバー！」ハリーは夢中で叫んだ。

「マルフォイは君が代理で来るのに、いくら払った？」

なぜそんなことを口走ったのか、ハリーは自分でもわからなかったが、ギクリとしたハーバーは、スニッチをつかみ損ね、指の間をすり抜けたスニッチを飛び越してしまった。そしてハリーは、パタパタ羽ばたく小さな球めがけて腕を大きく振り、キャッチした。

「やった！」

ハリーが叫んだ。スニッチを高々と掲げ、ハリーは矢のように地上へと飛んだ。

状況がわかったとたん、観衆から大歓声が湧き起こり、試合終了を告げるホイッスルがほとんど聞こえないほどだった。

「ジニー、どこに行くんだ？」ハリーが叫んだ。

選手たちが空中で塊になって抱きつき合い、ハリーが身動きできないでいると、ジニーだけがそこを通り越して飛んでいった。

そして大音響とともに、ジニーは解説者の演台に突っ込んだ。

観衆が悲鳴を上げ、大笑いする中、グリフィンドール・チームが壊れた演台の脇に着地してみると、木っ端微塵の下敷きになって、ザカリアスが弱々しく動いていた。

カンカンに怒ったマクゴナガル先生に、ジニーがけろりと答える声がハリーの耳に聞こえてきた。

「ブレーキをかけ忘れちゃって。すみません、先生」

ハリーは笑いながら選手たちから離れ、ジニーを抱きしめた。

しかしすぐに放し、ジニーの眼差しを避けながら、代わりに、歓声を上げているロンの背

Smith really was an idiot, thought Harry, hadn't he noticed them collide? But next moment, his stomach seemed to drop out of the sky — Smith was right and Harry was wrong: Harper had not sped upward at random; he had spotted what Harry had not: The Snitch was speeding along high above them, glinting brightly against the clear blue sky.

Harry accelerated; the wind was whistling in his ears so that it drowned all sound of Smith's commentary or the crowd, but Harper was still ahead of him, and Gryffindor was only a hundred points up; if Harper got there first Gryffindor had lost ... and now Harper was feet from it, his hand outstretched. ...

“Oi, Harper!” yelled Harry in desperation. “How much did Malfoy pay you to come on instead of him?”

He did not know what made him say it, but Harper did a double-take; he fumbled the Snitch, let it slip through his fingers, and shot right past it. Harry made a great swipe for the tiny, fluttering ball and caught it.

“YES!” Harry yelled. Wheeling around, he hurtled back toward the ground, the Snitch held high in his hand. As the crowd realized what had happened, a great shout went up that almost drowned the sound of the whistle that signaled the end of the game.

“Ginny, where're you going?” yelled Harry, who had found himself trapped in the midst of a mass midair hug with the rest of the team, but Ginny sped right on past them until, with an almighty crash, she collided with the commentator's podium. As the crowd shrieked and laughed, the Gryffindor team landed beside the wreckage of wood under which

中をバンと叩いた。
仲間割れをすべて水に流したグリフィンドール・チームは、腕を組み拳を突き上げて、サポーターに手を振りながら競技場から退出した。
更衣室はお祭り気分だった。
「談話室でパーティだ！ シェーマスがそう言ってた！」ディーンが嬉々として叫んだ。
「行こう、ジニー！ デメルザ！」
ロンとハリーの二人が、最後に更衣室に残った。
外に出ようとしたちょうどそのとき、ハーマイオニーが入ってきた。
両手でグリフィンドールのスカーフをねじりながら、困惑した、しかしきっぱり決心した顔だった。
「ハリー、お話があるの」ハーマイオニーが大きく息を吸った。
「あなた、やってはいけなかったわ。スラグホーンの言ったことを聞いたはずよ。違法だわ」
「どうするつもりなんだ？ 僕たちを突き出すのか？」ロンが詰め寄った。
「二人ともいったい何の話だ？」
ニヤリ笑いを二人に見られないように、背中を向けたままユニフォームを掛けながら、ハリーが言った。
「何の話か、あなたにははっきりわかっているはずよ！」
ハーマイオニーが甲高い声を上げた。
「朝食のとき、ロンのジュースに幸運の薬を入れたでしょう！ 『フェリックス・フェリシス』よ！」
「入れてない」ハリーは二人に向き直った。
「入れたわ、ハリー。それだから何もかもラッキーだったのよ。スリザリンの選手は欠場するし、ロンは全部セーブするし！」
「僕は入れてない！」
ハリーは、こんどは大きくニヤリと笑った。
上着のポケットに手を入れ、ハリーは、今朝ハーマイオニーが自分の手中にあるのを目撃したはずの、小さな瓶を取り出した。
金色の水薬がたっぷり入っていて、コルク栓はしっかり蠟づけしたままだった。
「僕が入れたと、ロンに思わせたかったん

Zacharias was feebly stirring; Harry heard Ginny saying blithely to an irate Professor McGonagall, “Forgot to brake, Professor, sorry.”

Laughing, Harry broke free of the rest of the team and hugged Ginny, but let go very quickly. Avoiding her gaze, he clapped a cheering Ron on the back instead as, all enmity forgotten, the Gryffindor team left the pitch arm in arm, punching the air and waving to their supporters.

The atmosphere in the changing room was jubilant.

“Party up in the common room, Seamus said!” yelled Dean exuberantly. “C’mon, Ginny, Demelza!”

Ron and Harry were the last two in the changing room. They were just about to leave when Hermione entered. She was twisting her Gryffindor scarf in her hands and looked upset but determined.

“I want a word with you, Harry.” She took a deep breath. “You shouldn’t have done it. You heard Slughorn, it’s illegal.”

“What are you going to do, turn us in?” demanded Ron.

“What are you two talking about?” asked Harry, turning away to hang up his robes so that neither of them would see him grinning.

“You know perfectly well what we’re talking about!” said Hermione shrilly. “You spiked Ron’s juice with lucky potion at breakfast! Felix Felicis!”

“No, I didn’t,” said Harry, turning back to face them both.

“Yes you did, Harry, and that’s why

だ。だから、君が見ている時を見計らって、入れるふりをした」

ハリーはロンを見た。

「ラッキーだと思い込んで、君は全部セーブした。すべて君自身がやったことなんだ」

ハリーは薬をポケットに戻した。

「僕のかぼちゃジュースには、本当に何も入ってなかったのか？」ロンが哑然として言った。

「だけど天気はよかったし……それにベイジーはプレイできなかったし……僕、ほんとのほんとに、幸運薬を盛られなかったの？」

ハリーは入れていないと首を振った。ロンは一瞬ボカンと口を開け、それからハーマイオニーを振り返って声色をまねた。

「ロンのジュースに、今朝『フェリックス・フェリシス』を入れたでしょう。それだから、ロンは全部セーブしたのよ！ どうだ！ ハーマイオニー、助けなんかなりたって、僕はゴールを守るんだ！」

「あなたができないなんて、一度も言っていないわーロン、あなただって、薬を入れられたと思ったじゃない！」

しかしロンはもう、ハーマイオニーの前を大股で通り過ぎ、箒を担いで出ていってしまった。

「えーと」

突然訪れた沈黙の中で、ハリーが言った。こんなふうに裏目に出るとは思いもよらなかった。

ハーマイオニーを怒らせてしまった。もの凄く居心地が悪い。

「じゃ……それじゃ、パーティに行こうか？」

「行けばいいわ！」

ハーマイオニーは瞬きして涙をこらえながら言った。

「ロンなんて、私、もううんざり。私がいったい何をしたらって言うの……」

そしてハーマイオニーも、嵐のように更衣室から出ていった。

ハリーは人混みの中を重い足取りで城に向かった。

校庭に行く大勢の人が、ハリーに祝福の言葉をかけた。

everything went right, there were Slytherin players missing and Ron saved everything!”

“I didn’t put it in!” said Harry, grinning broadly. He slipped his hand inside his jacket pocket and drew out the tiny bottle that Hermione had seen in his hand that morning. It was full of golden potion and the cork was still tightly sealed with wax. “I wanted Ron to think I’d done it, so I faked it when I knew you were looking.” He looked at Ron. “You saved everything because you felt lucky. You did it all yourself.”

He pocketed the potion again.

“There really wasn’t anything in my pumpkin juice?” Ron said, astounded. “But the weather’s good ... and Vaisey couldn’t play. ... I honestly haven’t been given lucky potion?”

Harry shook his head. Ron gaped at him for a moment, then rounded on Hermione, imitating her voice. “*You added Felix Felicis to Ron’s juice this morning, that’s why he saved everything! See! I can save goals without help, Hermione!*”

“I never said you couldn’t — Ron, *you* thought you’d been given it too!”

But Ron had already strode past her out of the door with his broomstick over his shoulder.

“Er,” said Harry into the sudden silence; he had not expected his plan to backfire like this, “shall ... shall we go up to the party, then?”

“You go!” said Hermione, blinking back tears. “I’m *sick* of Ron at the moment, I don’t know what I’m supposed to have done. ...”

And she stormed out of the changing room too.

しかし、ハリーは虚脱感に襲われていた。ロンが試合に勝てば、ハーマイオニーとの仲はたちまち戻るだろうと信じきっていた。ハーマイオニーは、いったい何をしたかと聞いたが、ビクトール・クラムとキスしたからロンが怒っているのだと、どうやって説明すればいいのか見当もつかなかった。なにしろその罪を犯したのは、ずっと昔のことなのだ。しかもそもそも罪ではない。恋人ならごく当たり前の事なのだ。

ハリーが到着したとき、グリフィンボールの祝賀パーティは宴もたけなわだったが、ハリーはハーマイオニーの姿を見つけることができなかった。ハリーの登場で、新たに歓声と拍手が湧き、ハリーはたちまち、祝いの言葉を述べる群衆に囲まれてしまった。試合の様子を逐一聞きたがるクリーピー兄弟を振りきったり、ハリーのどんなつまらない話にも笑ったり睫毛をパチパチさせたりする大勢の女の子たちに囲まれてしまったりで、ロンを見つけるまでに時間がかかった。スラグホーンのクリスマス・パーティに一緒に行きたいと、しつこくほのめかすロミルダ・ベインをやっと振り払い、人混みを掻き分けて飲み物のテーブルのほうに行こうとしていたハリーは、ジニーにばったり出会った。ピグミーパフのアーノルドを肩に載せ、足下ではクルックシャンクスが、期待顔で鳴いていた。

「ロンを探してるの？」
ジニーはわが意を得たりとばかりニヤニヤしている。
「あそこよ、あのいやらしい偽善者」
ハリーはジニーが指した部屋の隅を見た。そこに、部屋中から丸見えになって、ロンがラベンダー・ブラウンと、どの手がどちらの手かわからないほど密接に絡み合って立っていた。
「ラベンダーの顔を食べてるみたいに見えない？」ジニーは冷静そのものだった。
「でもロンは、テクニクを磨くのに何かや

Harry walked slowly back up the grounds toward the castle through the crowd, many of whom shouted congratulations at him, but he felt a great sense of letdown; he had been sure that if Ron won the match, he and Hermione would be friends again immediately. He did not see how he could possibly explain to Hermione that what she had done to offend Ron was kiss Viktor Krum, not when the offense had occurred so long ago.

Harry could not see Hermione at the Gryffindor celebration party, which was in full swing when he arrived. Renewed cheers and clapping greeted his appearance, and he was soon surrounded by a mob of people congratulating him. What with trying to shake off the Creevey brothers, who wanted a blow-by-blow match analysis, and the large group of girls that encircled him, laughing at his least amusing comments and batting their eyelids, it was some time before he could try and find Ron. At last, he extricated himself from Romilda Vane, who was hinting heavily that she would like to go to Slughorn's Christmas party with him. As he was ducking toward the drinks table, he walked straight into Ginny, Arnold the Pygmy Puff riding on her shoulder and Crookshanks mewing hopefully at her heels.

“Looking for Ron?” she asked, smirking. “He’s over there, the filthy hypocrite.”

Harry looked into the corner she was indicating. There, in full view of the whole room, stood Ron wrapped so closely around Lavender Brown it was hard to tell whose hands were whose.

“It looks like he’s eating her face, doesn’t

る必要があるしね。いい試合だったわ、ハリー」

ジニーはハリーの腕を軽く叩いた。ハリーは胃の中が急にザワッと騒ぐのを感じた。しかし、ジニーはバタービールのお代わりをしにいった。

クルックシャンクスが黄色い目をアーノルドから離さずに、後ろからトコトコついていった。

ハリーは、すぐには顔を現しそうにないロンから目を離れた。

ちょうどそのとき、肖像画の穴が閉まった。そこから豊かな栗色の髪がずっと消えるのを見たような気がして、ハリーは身持ちが沈んだ。

ハーマイオニーが悲しむのは身を切られるように辛かった。

ロミルダ・ペインをまたまたかわし、ハリーはすばやく前進して「太った婦人」の肖像画を押し開けた。

外の廊下は誰もいないように見えた。

「ハーマイオニー？」

鍵のかかっていない最初の教室で、ハリーはハーマイオニーを見つけた。

さえずりながらハーマイオニーの頭の周りに小さな輪を作っている黄色い小鳥たちのほかは、誰もいない教室で、ぽつんと先生の机に腰掛けていた。

いましがた創り出した小鳥に違いない。

こんなときにこれだけの呪文を使うハーマイオニーに、ハリーはほとほと感心した。

「ああ、ハリー、こんばんは」

ハーマイオニーの声は、いまにも壊れそうだった。

「ちょっと練習していたの」

「うん……小鳥たち……あの……とってもいいよ……」ハリーが言った。

ハリーは、何と言葉をかけていいやらわからなかった。

ハーマイオニーがロンに気づかずに、パーティがあまり騒々しいから出てきただけという可能性はあるだろうか、とハリーが考えていたそのとき、ハーマイオニーが不自然に高い声で言った。

「ロンは、お祝いを楽しんでるみたいね」

it?” said Ginny dispassionately. “But I suppose he’s got to refine his technique somehow. Good game, Harry.”

She patted him on the arm; Harry felt a swooping sensation in his stomach, but then she walked off to help herself to more butterbeer. Crookshanks trotted after her, his yellow eyes fixed upon Arnold.

Harry turned away from Ron, who did not look like he would be surfacing soon, just as the portrait hole was closing. With a sinking feeling, he thought he saw a mane of bushy brown hair whipping out of sight.

He darted forward, sidestepped Romilda Vane again, and pushed open the portrait of the Fat Lady. The corridor outside seemed to be deserted.

“Hermione?”

He found her in the first unlocked classroom he tried. She was sitting on the teacher’s desk, alone except for a small ring of twittering yellow birds circling her head, which she had clearly just conjured out of midair. Harry could not help admiring her spell-work at a time like this.

“Oh, hello, Harry,” she said in a brittle voice. “I was just practicing.”

“Yeah ... they’re — er — really good. ...” said Harry.

He had no idea what to say to her. He was just wondering whether there was any chance that she had not noticed Ron, that she had merely left the room because the party was a little too rowdy, when she said, in an unnaturally high-pitched voice, “Ron seems to be enjoying the celebrations.”

「あー……そうかい？」ハリーが言った。
「ロンを見なかったようなふりはしないで」
ハーマイオニーが言った。
「あの人、特に隠していた様子はー」
背後のドアが突然開いた。ハリーは凍りつく
思いがした。
ロンがラベンダーの手を引いて、笑いながら
入ってきたのだ。
「あっ」ハリーとハーマイオニーに気づい
て、ロンがギクリと急停止した。
「あらっ！」ラベンダーはクスクス笑いなが
ら後退りして部屋から出ていった。
その後ろでドアが閉まった。
恐ろしい沈黙が膨れ上がり、うねった。
ハーマイオニーはロンをじっと見たが、ロン
はハーマイオニーを見ようとせず、空威張り
と照れくささが奇妙に交じり合った態度でハ
リーに声をかけた。
「よう、ハリー！どこに行ったのかと思った
よ」
ハーマイオニーは、机からするりと降りた。
金色の小鳥の小さな群れが、さえずりながら
ハーマイオニーの頭の周囲を回り続けていた
ので、ハーマイオニーはまるで羽の争えた不
思議な太陽系の模型のように見えた。
「ラベンダーを外に待たせておいちゃいけな
いわ」ハーマイオニーが静かに言った。
「あなたがどこに行ったのかと思うでしょ
う」
ハーマイオニーは背筋を伸ばして、ゆっくり
とドアのほうへ歩いていった。
ハリーがロンをちらりと見ると、この程度で
すんでほっとした、という顔をしていた。
「オパグノ！＜襲え＞」出口から鋭い声が飛
んできた。
ハリーがすばやく振り返ると、ハーマイオニ
ーが荒々しい表情で、杖をロンに向けてい
た。
小鳥の小さな群れが、金色の丸い弾丸のよう
に、次々とロンめがけて飛んできた。
ロンは悲鳴を上げて両手で顔を隠したが、小
鳥の群れは襲いかかり、肌という肌をとこと
ろかまわず突っつき、引っ掻いた。
「こいつら追っばえ！」
ロンが早口に叫んだ。

“Er ... does he?” said Harry.

“Don’t pretend you didn’t see him,” said
Hermione. “He wasn’t exactly hiding it, was
—?”

The door behind them burst open. To
Harry’s horror, Ron came in, laughing, pulling
Lavender by the hand.

“Oh,” he said, drawing up short at the sight
of Harry and Hermione.

“Oops!” said Lavender, and she backed out
of the room, giggling. The door swung shut
behind her.

There was a horrible, swelling, billowing
silence. Hermione was staring at Ron, who
refused to look at her, but said with an odd
mixture of bravado and awkwardness, “Hi,
Harry! Wondered where you’d got to!”

Hermione slid off the desk. The little flock
of golden birds continued to twitter in circles
around her head so that she looked like a
strange, feathery model of the solar system.

“You shouldn’t leave Lavender waiting
outside,” she said quietly. “She’ll wonder
where you’ve gone.”

She walked very slowly and erectly toward
the door. Harry glanced at Ron, who was
looking relieved that nothing worse had
happened.

“*Oppugno!*” came a shriek from the
doorway.

Harry spun around to see Hermione
pointing her wand at Ron, her expression wild:
The little flock of birds was speeding like a
hail of fat golden bullets toward Ron, who
yelped and covered his face with his hands, but
the birds attacked, pecking and clawing at

<p>しかしハーマイオニーは、復讐の怒りに燃える最後の一瞥を投げ、力任せにドアを開けて姿を消した。</p> <p>ハリーは、ドアがバタンと閉まる前に、すすり泣く声を聞いたような気がした。</p>	<p>every bit of flesh they could reach.</p> <p>“Gerremoffme!” he yelled, but with one last look of vindictive fury, Hermione wrenched open the door and disappeared through it. Harry thought he heard a sob before it slammed.</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------